

ホッブズ『法学要綱』の人間学的基礎

吉 田 達 志

人 文 社 会 教 室
(1980年9月8日 受理)

Thomas Hobbes: Human Nature in the Elements of Law

Tatsushi YOSHIDA

Department of Humanities
(Received September 8, 1980)

Hobbes says in a treatise of Human Nature, *De Homine* as follows: From the principal parts of Nature, Reason and Passion, have proceeded two kinds of learning, mathematical and dogmatical; the former is free from controversy and dispute, because it consisteth in comparing figure and motion only; in which things, truth, and the interest of men, oppose not each other: but in the other there is nothing undisputable, because it compareth men, and meddleth with their right and profit; in which, as oft as reason is against a man, so oft will a man be against reason. And from hence it cometh, that they who have written of justice and policy in general, do all invade each other and themselves with contradictions. To reduce this doctrine to the rules and infallibility of reason, there is no way, but, first, put such principles down for a foundation, as passion, not mistrusting, may not seek to displace; and afterwards to build thereon the truth of cases in the law of nature by degrees, till the whole have been inexpugnable.

My purpose in this paper is to consider the nature of man so far as is requisite for the finding out the first and most simple elements wherein the compositions of politic rules and laws are lastly resolved.

1

既に1640年に執筆されていたホッブズの著作『人間論』(*De Homine*)は、匿名で出版された『市民論』(*De Cive*)に後れること16年、1658年に出版されたが、この作品は『法学要綱』(*De Corpore Politico: or the Elements of Law, moral and politic*)第一部において展開されている議論の基礎をなすものである¹⁾。

常にみずからの意図を率直に語るこのマームズベリ出身の思索家は、ニューキャッスル伯爵ウィリアムへの献呈辞の中で、『人間論』を書いた意図は、正義と政治一般が拠るべき新しい基礎を樹立することにあると述べている。

理性 (Reason) と情念 (Passion) は二種類の学問、つまり、「数学」 (mathematical learning) と「教義学」

(dogmatical learning) とを産み出した。前者は形と運動のみを比較することにあり、そこでは「真実」 (truth) と「人間の利害」 (the interest of men) とは相互に対立しないから、けんかや口論を免れている。けれども後者は人々を比較させ、人々の権利と利益に干渉するし、そこでは理性が人間に敵対するたびごとに、人間も理性に敵対することになるから、後者にはどうしても争う余地が生じてしまう。この理由から、正義と政治一般について著作活動をする人々は皆、相互に相手を侵害し、自家撞着に悩まされることになる。こうした教義を規則と理性の不可謬性に従わせるには、先ず第一に情念が取って代わろうとするのを阻むという原則を基礎とし、その後、自然の法則の範囲内にある事柄の真実を、全体が論破されえないまでに次第にこの基礎の上に樹立するより他に方法はないのである²⁾。

そして、「自然の法と政治の法」 (laws natural and

politic) の原理を確実に、明快に説明するためには、「人間の本性」(human nature) とは何か、「政治体」(body politic) とは何か、我々が「法」(law) と呼ぶものとは何かということについての知識が必要である³⁾。ホッブズの『人間論』においては、特に「人間の本性」、文字通りには「人間の自然」が取上げられ、検討されている。つまり、正義と政治一般にまつわる問題が、一切の先入見と虚飾を排除されて、人間についての自然学から、換言すると人間についての生物学的自然の立場から、眺められ、検討されているのである。

人間はなぜ誤りに陥りやすいのかということの原因は、この観点から考察されている。感覚というものは、人間を「欺く」(deceptions) 力を持っていること、名称の付与が「一定していない」(unconstantly) こと、名称が「あいまいな意味」(equivocation) に使われやすいこと、「情念」(passion) によって「様々な意味を与えられる」(diversified) こと(二人の人は何が善であり、何が悪と呼ばれるべきか、何が気前のよさであり、何が浪費と呼ばれるべきか、何が勇気であり、何が向こう見ずと呼ばれるべきかということについて、ほとんど意見が一致しないのである)、人間は推論において背理ないしは誤謬に陥りやすいことを考慮すると、正に我々の知識と感覚の第一の基礎から「新しい方針で」(anew) 始めないと、これらの原因からどうしても生まれてくる人間の多くの誤まりを「正す」(rectify) ことは不可能である⁴⁾。

以下、ホッブズの『人間論』の内容に則しつつ、順を追って、正義と政治が依拠する原理の基礎としての人間のあるがままの自然を考察しよう。

2

「概念」(conceptions) は、「頭脳」(head) の内部物質における「運動」(motion) であり、この運動はそこに「止まっていずに」(not stopping) 「心臓」(heart) に達し、必然的に「生命的」(vital) と呼ばれる運動を「助長する」(help) か、「妨害する」(hinder) かのどちらかとなる。「助長する」場合には、それは「喜び」(delight) とか「満足」(contentment) とか「愉快」(pleasure) とか呼ばれるが、これは概念が頭脳の中における運動に他ならないように、実際には心臓に関する運動に他ならない。そして、この運動を惹き起こす「対象」(objects) は、「愉快である」(pleasant) とか「喜ばしい」(delightful) とか呼ばれる。しかし、このような運動が、生命運動を「弱体化させる」(weakeneth) か、或いは妨害する場合には「苦痛」(pain) と呼ばれる⁵⁾。

「愉快」ないしは「苦痛」を伴うこの運動はまた、快楽を与えてくれるものへ「接近させる」(draw near)

か、或いは不愉快を与えるものから「退かせる」(retire) かのいずれかの「誘引」(solicitation) ないしは刺激となる。この誘引は「努力」(endeavour) ないしは「動物的」(animal) 運動の内的はじまりであり、対象が「喜びを与える」(delighteth) 場合にはそれは「欲求」(appetite) と呼ばれ、対象が「不愉快を与える」(displeaseth) 場合にはそれは、それが「現在の」(present) 不愉快についてならば「嫌悪」(aversion) と呼ばれ、「予期される」(expected) 不愉快についてならば「恐怖」(fear) と呼ばれる⁶⁾。

次に、各人はそれぞれ自分を喜ばせ、自分自身にとって愉快なものを「善」(good) と呼び、自分を不快にさせるものを「悪」(evil) と呼ぶ。それ故、各人はそれぞれ他人とは「体質」(constitution) が異なるから、人々の間においてはまた、善と悪との共通の区別など存在しないのである。また、関係ということを考慮しない絶対的善なるものは存在しない。なぜならば、我々が全能の神のうちに理解する善でさえ、それは「我々にとっての神の善」(his goodness to us) だからである⁷⁾。

「欲求」が我々を喜ばせるものへ向っての動物的運動の始まりであるように、欲求の「達成」(attaining) は動物的運動の「目的」(end) である。この目的を我々が達成すると、そのことによって我々が得る喜びは「結実」(fruition) と呼ばれる。目的ということに関して言えば、あるものはもうすぐ手に入るとか、またあるものはまだ遠く離れているといった具合であるが、まだずっと遠く離れている目的に較べて、それよりも早く手に入れることのできる目的であっても、それは目的ではなく「手段」(means) と呼ばれ、目的への「道」(way) にすぎない。しかしながら、古代の哲学者達がそこに「至福」(felicity) を見、そこへの道を大いに論議した「究極の」(utmost) 目的なるものはこの世に存在しないし、ユートピアに到る道以上にそこに到る道は存在しないのである。というのは、我々は生きている限り欲求を持っているのであり、欲求は更に遠くにある目的を前提条件とするからである。更に遠くにある目的に到る道ないしは手段として我々を喜ばせるものを、我々は「有益な」(profitable) と呼び、その結実を「効用」(use) と呼ぶ。有益でないものを「価値がない」(vain) と呼ぶ⁸⁾。

こうして、あらゆる喜びは欲求であり、更に遠くにある目的を前提条件とするから、「過程」(proceeding) にしか満足はありえないということが理解される。それ故、我々は人々がより大きな富とか名誉とか他の力を手に入れば入るほど彼らの欲求は絶えず肥大化し続けるということ、更にある種の力を究極にまで掌握してしまうと、自分がある別の種類の力において他人よりも劣っていると見なすと、その別の種類の力を追求するようになるということを見ても驚いてはならない。従って、絶え

ざる喜びを意味する至福は、「成功のうちに終わった」(having prospered) ことにあるのではなく、現に「成功しつつある」(prospering) ことにある⁹⁾。

これまでに、我々が概念と呼ぶ頭脳の運動は心臓に達し、そこでは情念と呼ばれと述べたが、次にどのような概念から我々が通常注目するあの情念の一つ一つが生ずるかを探求し、明らかにしよう。三種類の概念が存在する。一つは、「現在の」(present) 概念であり、「感覚」(sense) のことである。もう一つは、「過去の」(past) 概念であり、「記憶」(remembrance) のことである。更にもう一つは、「将来の」(future) 概念であり、「期待」(expectation) のことである。そして、これらの概念の一つ一つは、現在の喜びないしは苦痛となって現われる。将来のものについての概念は、過去となったものの記憶から生ずる、「同じもの」(the same) についての「仮定」(supposition) に他ならない。あるものが「将来生起するだろう」(will be hereafter) ということを我々が「知る」(know) のは、そのあるものを産み出す力を有している「何か」(something) が「現時点で」(at the present) 存在していることを我々が知っている限りにおいてであるし、あるものが将来別のものを産み出す力を現在有していることを知るができるのは、そのあるものがこれまでに類似のものを産み出したことがあるという記憶によってだけである。従って、将来についてのあらゆる概念は、何物かを産み出す能力のある力についての概念のことだということになる。それ故、将来の喜びを期待する人は、それと同じものを達成させてくれる自分自身の中の力のことを思い浮かべなければならない¹⁰⁾。

そして、次に述べようと思う情念は将来のことについて概念を抱くこと、つまり、過去の力と将来の行為について概念を抱くことにあるから、情念について述べる前にこの力ということについて触れておこう。

この「力」(power) というのは、「身体」(body), 「栄養」(nutritive), 「生殖」(generative), 「刺激」(motive), 更に「心」(mind), 「知識」(knowledge) の諸能力と同じものであるばかりでなく、これに加えて「富」(riches), 権威の「地位」(place), 「友情」(friendship) ないしは「好意」(favour), それに「幸運」(good fortune) によって獲得される「それ以上の」(further) 力のことでもある。これらの力と反対のものは、それぞれ「不能」(impotencies) ないしは「病弱」(infirmities) ないしは前述の力の「不足」(defects) である。そして、ある人の力は他の人の力の効果を妨害するから、力とは、ある人の力の他の人の力への「超過分」(excess) と同じである。というのは、対等な力が対立すれば共倒れになってしまうからであり、そのような対立は競争と呼

ばれる¹¹⁾。

次に、我々が自分自身の力を知るための「印」(signs) となるものは、同じその力から産み出される「行動」(actions) であり、他の人々が我々自身の力を知るための印となるものは、通例、そのような力が産み出す「行動」や「そぶり」(gesture) や「表情」(countenance) や「話し方」(speech) である。そして、力の「承認」(acknowledgment) は「名誉」(honour) と呼ばれ、心の中で人に名誉を与えるということは、自分自身が競争し、比較している人の方が余分な力を持っているということを承認することである。名誉と不名誉の印に従って、我々は人間の価値を評価するのである。

名誉の印とは、ある人が他の人の力と価値を承認していることを我々が見分けるためのものであり、それには「賞讃すること」(praise), 「讃美すること」(magnify), 「崇めること」(bless), 幸せだと呼ぶこと、懇願ないしは嘆願すること、感謝すること、贈与すること、服従すること、注意深く傾聴すること、敬意を払って語ること、礼儀にかなって近づくこと、遠慮すること、屈すること等があるが、これらは力の弱い者が力の強い者に与える名誉である。

他方、力の強い者が力の弱い者に与える名誉の印には、競争相手の前でその人を賞讃するか或いは昇進させること、もっと喜んで聞いてやること、もっと親密に語りかけてやること、もっと近づくのを認めてやること、進んでその人を用いること、進んでその人に助言をこうこと、その人の意見を採用すること、もしも金がわずかに必要な金額を満たしていないならば、むしろ金よりも欲しがっている品を贈物として与えること (というのは、わずかに必要な金額の方が、多く必要な金額よりも大きな不足だからである) といったものがある。以上が名誉と力の印の例である。なお、「尊敬」(reverence) とは、我々が他人について有する概念であり、それは、その人が我々に対して「善」と「害悪」(hurt) の両方をなす力を有してはいるが、我々に対して「害悪」をなす「意志」(will) を有してはいないということである¹²⁾。

さて、名誉ないしは不名誉の印によって人々に示される快ないしは不快の中に、情念の本質が存在するから、次に情念の本質について考察しよう。

3

「栄光」(GLORY) とは、我々自身の力が我々と争っている人の力よりも勝っているという概念から生ずる情念であり、栄光の印には、表情やその他の身体のそぶりに加えて、言葉の「誇示」(ostentation) や「横柄な振舞」(insolency) がある。そして、この情念はそれが不

愉快を与える人からは「誇り」(pride)と呼ばれ、愉快を与える人からは自分自身についての「正当な評価」(just valuation)と呼ばれる。

栄光とは反対の情念は、我々自身の弱点への懸念から生ずるが、それはそのことをよしとする人々からは「謙遜」(humility)と呼ばれ、その他の人々からは「失意」(dejection)と呼ばれる。つまり、これらの概念はそれぞれ正当な理由があるか否かということによるものであり、前者の場合には、あることを無分別に試みることへの恐怖心を産み出すが、後者の場合には、完全に人を怯えさせ、その人は公然と話をしようとはしないし、また、行為が立派な成功を取めるとも期待しないのである。

自分自身にうぬぼれを抱き、それに立派な根拠があるにもかかわらず、自分自身の中にある欠陥ないしは弱点を見出すと、うぬぼれという情念の産み出す「強情」(frowardness)の記憶が戻って来て、その人を失意に陥し入れるということが時に起こるが、この情念は「恥」(shame)と呼ばれる。この恥のために積極性は冷却され、抑制されるから、将来に対して益々慎重になってしまう。

「勇気」(courage)とは、広い意味では何か悪に直面しても恐怖心が存在しないことであるが、もっと厳密な意味では目的への途上に立ちふさがった「痛手」(wounds)や「死」(death)への「輕蔑」(contempt)のことである。

「怒り」(anger)ないしは突然の勇気とは、直面している抵抗を排除しようとする欲求のことである。

「復讐心」(vengefulness)とは、我々に害悪を加えた人が、自分自身の行為が自分自身への害悪となつてはね返ってくることを理解させ、我々が同じ行為をその人に行うのを承認させるという期待ないしは想像から生ずる情念のことであり、これこそ復讐の極みである。というのは、悪に対して悪を以て報いることによって、敵が自分自身の行為に対して不愉快になるようにさせることは困難ではないが、敵にそれと同じ行為をしてもよいということを承認させるということは非常に困難であるから、多くの人々はそのことを承認させようとするよりもむしろ、戦って死んでしまう方を選ぶからである。復讐は自分の死ではなく、敵の捕獲ないしは屈伏を目的とする。殺すことは、憎悪している人々の目的であるが、それは自分自身が恐怖から免れるためであるのに対して、復讐は勝利を目的とするのであって、それは自分の死の上には存在しないのである。

「後悔」(repentance)とは、なされた行為が達成しようとした目的への道から外れているという意見ないしは知識から生ずる情念のことであり、このことの結果は、もはやその道は辿りはしないが、目的を考慮することによってもっとよい道を進むように自分を仕向けると

いうことになる。

恐怖とは悪の予想のことであるように、「希望」(hope)とは善の予想のことである。けれども、我々の心の中に善を予想させる原因と悪を予想させる原因とが交互に作用している場合には、前者が後者よりも強ければ、情念全体は希望となるし、その逆ならばそれは恐怖となる。希望の絶対的な「欠如」(privation)は「絶望」(despair)であり、そこに至るまでの段階は「氣後れ」(diffidence)である。

「信頼」(trust)とは、我々がそこから善を予想したり、希望したりする人を信ずることから生ずる情念のことであり、そこには疑念が存在しないから、我々はこの信頼の上に立ちながら、同じ善を手に入れようとして他の道を進むということとはしないのである。これに対して、「不信」(distrust)とは、他の手段を用意するように仕向ける疑念のことである。

「憐れみ」(pity)とは、我々自身の将来に降りかかるかもしれない災難についての想像のことであり、他の人に降りかかる災難についての感覚から生ずる。しかしながら、将来の災難がそれを受けるに値すると我々が考えなかった人の上に降りかかった場合には、同じことが我々に起こる蓋然性が更に増すという理由から、同情はより大きなものとなる。というのは、罪のない人に起こる悪はすべての人に起こりうるからである。一方、大きな罪を犯してその罰を受けている人を見ても、それが我々自身の上に降りかかることは容易に受取られないから、憐れみはより小さなものとなる。それ故、人間は自分の愛する人々を憐れみがちである。なぜならば、自分の愛する人々は善に値すると見なすから、災難を受けるに値するとは考えられないからである。憐れみの反対は「無慈悲」(hardness of heart)であり、想像力の鈍さか、或いは同じような災難を自分自身は免れているという誇大な意見か、或いは万人への憎悪か、そのいずれかのうちから生ずる。

「憤り」(indignation)とは、ある人が立派な成功を取めたのに、その人がそれに値しないと考えることから、あの「悲しみ」(grief)のことである。

「競争心」(emulation)とは、自分自身が競争相手に先を越されたのを見ることから生ずる悲しみのことであるが、それは自分自身の能力による対等への、或いは将来の優越への希望を伴っている。けれども、「羨望」(envy)とは、競争相手にある不運が降りかかるかもしれないという想像から生まれた喜びと一緒にあった悲しみのことである。

「笑い」(laughter)という情念とは、他人の弱点ないしは自分自身の以前の弱点と比較することによって、自分自身の中にすぐれたものを突然思い浮かべることか

ら生ずる「突然の栄光」(sudden glory)のことに他ならない。というのは、現在不名誉となるものが何ものなければ、自分自身の過去の愚行が突然記憶に甦ると、人間はそれを笑うものだからである。それ故、笑われたり、嘲られたりすることを、つまり、勝誇った態度を示されることを人間は極端に悪いことだと見なすのは、何ら不思議ではない。

これと反対のものであり、その印は涙による顔のゆがみである情念は「泣くこと」(weeping)と呼ばれるが、これは自分自身との「突然の仲違い」(sudden falling out with)ないしは突然生じた欠陥についての概念のことである。従って、子供はよく泣く。というのは、子供は自分の欲するものはすべて与えられるべきだと考えているから、拒絶に会って期待が抑制されると、余りにも弱い精神状態におかれ、期待していたものすべての主人となることができなくなるからである。女は男よりも我意を通すことに慣れているばかりでなく、また、自分の力を自分を守護してくれる人の力と愛情によって評価することにも慣れているから、男よりもよく泣く傾向がある。男は復讐を行っていても、その復讐が敵の後悔によって突然中止されたり、阻止されたりした場合に泣く傾向がある。これは「和解」(reconciliation)の涙である。

人間が「性欲」(lust)と呼ぶ欲求とそれに関連する喜びは、「感覚的」(sensual)快楽であるが、それだけではなくそこにはまた、心の喜びもある。というのは、それは満足させるということと、満足させて貰うということとの二つの欲求から成っていて、相手を楽しませる楽しさというのは、感覚的なものではなく、満足させるほどの力を有しているという想像から生まれる喜びだからである。この性欲という名称は、それが非難される場合に使用されるが、そうでない場合には愛という一般的な名称が使用される。なぜならば、この情念は両性の全く同一の制限のない欲望であり、飢えと同じように自然なものだからである。

「愛」(love)とは、現在の善の実現を受入れる喜びのことであるが、ギリシア人がエロスと呼ぶ別の種類の愛がある。これは、人が恋をしているという場合の愛のことである。この情念は多様な性欲なしには存在しないから、先ほど述べたあの制限のない愛という性格を幾分か有していることは否定できない。けれども、人間の限界のない欲望と限定された欲望との間には大きな相異がある。後者は、詩人の巨大なテーマとなっているあの愛のことである。

あらゆる知識は「経験」(experience)から始まるから、従ってまた、新しい経験は新しい知識の始まりでもあり、経験の増大は知識の増大の始まりとなる。それ故、

新しく生起することはなんであって、以前には知らなかった何かを教えてくれる希望を与えてくれる。そして、新しく、初めて起こるものからの希望と将来の知識への期待は、「感嘆」(admiration)と呼ばれる情念のことである。この情念は欲求という点から見ると「好奇心」(curiosity)と呼ばれるが、それは知識欲のことである。感嘆と好奇心というこの情念から名称の発明や万物を産み出す原因についての仮説が生じたのである。すべての「哲学」(philosophy)、たとえば「天文学」(astronomy)や「自然哲学」(natural philosophy)といったものは、ここにその起源を有するのである。

「正々堂々」(magnanimity)とは、立派な根拠のある栄光のことであり、公然と自分の目的を達成するのに十分な力を有しているという経験に裏打されている。「憶病」(pusillanimity)とは、そのことへの疑念のことである。従って、「虚栄」(vain glory)の印と同じものがまた、憶病の印となる。というのは、十分な力というものは目的へと栄光に拍車をかけるからである。「名声」(fame)(それが本物であろうと偽物であろうと)に喜んだり、悲しんだりすることは憶病の印である。なぜならば、名声に頼ろうとする人は、自分自身の力で成功を勝取ろうとするのではないからである。同様に、「技巧」(art)や「欺瞞」(fallacy)は、自分自身の力ではなく、他人の無知を頼りにしているから憶病の印である。力の劣る者に敵意を抱き、争うのは戦争を終らせる力の不足から生ずるものだから、憶病の印である。他人を笑うことは、自分自身の能力による栄光ではなく、他人の弱点による見せかけの栄光であるから、憶病の印である。「優柔不断」(irresolution)は、審議を難しくさせている小さな障害を取除く力の不足から生ずるから、憶病の印である¹³⁾。

さて、今までに挙げてきた情念を理解するためには、人生を競走になぞらえることが我々の目的にとって有効であろう。けれども、この「競走」(race)は、別の「目標」(goal)とか、別の「栄冠」(garland)を持っていると考えてはならない。この競走こそ一番大事な目標であり、栄冠なのだ。

努力することは、欲求の表れである。

無気力なことは、肉欲に耽っていることの表れである。

他人が後れたと考えることは、栄光である。

他人が先んじたと考えることは、謙遜である。

振返って見て道を譲ることは、虚栄である。

先に進まないことは、憎悪となる。

振返ることは、後悔である。

生きていることは、希望である。

疲れきることは、絶望である。

前の人に追いつこうと努力することは、競争心である。

取って代ろうとか、打ち負かそうとすることは、欲望である。

予想される障害を突破しようと決心することは、勇気である。

突然の障害を突破することは、怒りである。

容易に突破することは、正々堂々である。

小さな障害に負けることは、億病である。

にわかに倒れることは、泣きたい気持ちにさせる。

他人が倒れるのを見ることは、笑いたい気持ちにさせる。

早く行ってはしかなかった人が早く行ってしまったのを見ることは、悲しみとなる。

早く行ってはしくない人が早く行ってしまふのを見ることは、憤りとなる。

他人をしっかりとかまえることは、愛するということである。

自分にしっかりとつかまっている人の行為を続けさせることは、慈悲心である。

急ぐ余りみずからを傷つけることは、恥となる。

絶えず先を越されて行くことは不幸である。

絶えず前の人を追い越して行くことは、至福である。

そして、競走を放棄することは、死ぬことである¹⁴⁾。

4

これまでに明らかにしたことは、感覚は外的物体の頭脳への運動から生じ、そこで変化したものが心臓に達することから情念が生ずるということであった。その結果、次に登場してくる問題とは、こういうことである。つまり、人々の知識の程度が異なるのは、人々の頭脳の「性質」(temper)が異なるよりもその差が大きいかから、ある人の能力が他の人の能力よりも勝っているという、我々が日常生活の中で観察するような能力の「不均等」(odds)を生む他の原因とは何かということを明らかにするという問題である。もしも、相違が頭脳の生来の性質によるとすると、なぜその同じ相違が先ず第一に感覚に現われないのか、その理由を理解することができないのである。感覚は賢い者にも余り賢くない者にも平等に働いているから、あらゆる感覚を有する頭脳においては同じ性質となって現われるからである。

しかしながら、経験から我々には次のことが分っている。つまり、喜びと悲しみは、必ずしもすべての人々において同じ原因から生ずるとは限らないし、人間はそれぞれ体質が非常に異なるから、ある人において「生命的体質」(vital constitution)を助長し、促進するものは

その人の喜びとなるが、他の人においては生命的体質を妨げ、邪魔するから悲しみを惹き起こすということである。それ故、「才知」(wits)の相違の起源は、情念の相違と、欲求が情念を導いて行く目的にある¹⁵⁾。

「教えにくい性質」(indocility)と呼ばれる心の欠陥が存在するが、これは異議を唱えられた事柄についての真実を、既に知っているという誤まった意見から生ずるのである。というのは、能力という点においては、数学者に教えられることと他の書物に一般的に論述されていることとの間には「証拠」(evidence)からして差が見られるが、それに較べるとその他の場合には人間の能力はそれほど不平等ではないということは確かだからである。従って、もしも人間の心が全く白紙の状態であるならば、正しい方法と正しい推論によって述べられたことはすべて、ほとんど同等に理解して貰えるようになるであろう。けれども、ひとたび人間が偽りの意見に黙従し、確かな記録として心の中に記入してしまうと、そのような人に分かるように話すことは、既に落書きされた紙の上に読みやすく書くことが不可能なのと同じように、不可能なことである。それ故、「教えにくい性質」の直接の原因は「先入見」(prejudice)にあり、先入見の原因は知識についての我々自身の誤まった意見にある¹⁶⁾。

もう一つの主要な心の欠陥は、「狂気」(madness)と呼ばれるものである。これは他の人々に対する優越という想像の産物であり、我々は狂気に由来する情念を持つことになる。そして、この概念は過度の虚栄ないしはくだらない落胆に他ならず、次のような例として表われることが多いが、これら例の一つ一つは外見上は誇りないしは心の落胆から生ずるのである。先ず第一に、ロンドンの大通りで説教壇の代りに馬車の上から、自分はキリストであると説いた人の例があるが、これは「宗教上の」(spiritual)誇りないしは狂気である。また、教養ある狂気のような例があるが、これは明らかに自分自身の能力を思い出させるような機会に出会って、心を取乱したような場合である。教養ある人々の中には、世界の終末の時や他のそのような予言に関する事柄を確定しようとする人々も記憶されてよからう。ドン・キホーテの勇ましい狂気は、「小説」(romance)を読むことが、億病人の中に産み出す虚栄の極致の表現に他ならない。更に、激怒と愛の狂気とは、敵ないしは愛人から受けた輕蔑が頭の中を支配している人の大きな憤りのことである。そして、誇りは形を帯び、行動となって人々を狂気へと駆立てるが、これは「空想的なこと」(fantastic)という名称で説明されるべきである。

以上の例は極端なものであるが、そこまではいかない段階のものもある。第一の例に属する一段階の例としては、別に確証もないのにみずからを「靈感を与えられ

た」(inspired)とか、他の信心家が有しているよりも以上の、神の聖霊の他の効力を有しているとか考える人がそうである。第二の例に属する一段階の例としては、絶えず自分の心をギリシア語ないしはラテン語で書かれた他人の詩文 (cento) に託して語る人がそうである。第三の例に属する一段階の例としては、愛と決闘に現在見られる多くの勇敢な行為がそうである。激怒の一段階には、「悪意」(malice)があり、空想的な狂気の一段階には、「気取り」(affectation)がある。

これまでの例は、過度のうぬぼれから生ずる狂気と、その様々な段階のものであったが、「過度のいわれなき恐怖」(too much vain fear)と「落胆」から生ずる他の狂気と、その様々な段階の例がある。たとえば、みずからをガラスのように壊れやすいというような想像をする、ふさぎ込んだ人々がそうだし、その段階としては、すべての途方もなく、不当な恐怖がそうであり、これは一般にふさぎ込んだ人々のうちに観察されるのである¹⁷⁾。

これまでは、事物から自然に生ずる情念について述べてきた。ところで、我々は自然の事物のみならず「超自然的」(supernatural)事物へも名称を付与し、すべての名称によってなんらかの意味と概念を有するはずであるから、「神」(God)という最も神聖な名称を口にする場合に、どのような思考と想像を我々は有することになるのかということを考察するのが次の課題となる。

全能の神というのは「計り知れない」(incomprehensible)ものだから、我々は「神」(Deity)についての概念ないしは「表象」(image)を持ちえない。従って、すべての「神の属性」(his attributes)という言葉は、実は、神の本質 (nature) に関する事柄を理解する (conceive) 力が我々に欠けているし、無能力であることを意味しているのであって、「神は存在する」(thero is a God)ということだけを除いて、神についてのどのような概念をも持ちえないということになる。なぜならば、我々が自然の理として認知する結果というものは、その結果が産み出される以前にその結果を産み出す力を含んでいるし、しかも力は、そのような力を有している物が存在していることを前提条件とするし、次に、産み出すための力を持って存在している物は、もしもそれが永遠のものではないとしたら、どうしてもそれ以前に存在している何かによって産み出されていなければならないし、更に再び、それはそれ以前の他の何かによって産み出されていなければならない。こうして、とうとう我々は永遠のもの、つまり、すべての力のうちの第一の力であり、すべての原因のうちの第一の原因に到達することになるからである。これこそが、神という名称から万人が理解することであり、神は永遠、不可解、全能を意味し

ているのである。かくして、神は「何で」(what)あるかということは知りえないが、神は存在するということを知りうるのである。我々を見ること、聞くこと、話すこと、知ること、愛することといった事柄を全能の神の属性に帰するけれども、これらの名称によって我々が理解するものは、人間 (我々はこれらの名称を人間の属性に帰しているのだが) の中にある何かであって、神の本質の中にあつては、これらの名称によって我々は何も理解することはできないのである¹⁸⁾。

ところで、「聖書」(Scriptures)が巨大な権威を持っているとしたら、そもそも、いったい我々はどのようにして聖書が神の言葉であるということを知ることができるのであろうか。

先ず第一に、もしも知識ということによって、感覚から生まれる確実で、自然的な学問 (science) のことであると理解するならば、我々はこのような知識を持っていると言うことはできない。というのは、このような知識は、感覚によって惹き起こされる概念から生ずるのではないということは明らかだからである。それに、もしも知識を超自然的なものと理解するならば、我々は靈感によってしか知識を所有することはできないし、この靈感については我々は「教義」(doctrine)によってしか判断することはできないから、自然的なものであろうと、超自然的なものであろうと、我々はどっちみち、まさしく「確実な学問」(infallible science)と「確証」(evidence)を有していると言えるような知識を所有することにはならないのである¹⁹⁾。かくして、聖書は神の言葉であるという、我々の持っている知識は「信仰」(faith)にすぎないということになる。この信仰は、聖パウロによって「見ぬ物をまこととするなり²⁰⁾」(the evidence of things not seen) (アペル人への書、第十一章、第一節)と、つまり、信仰によってのみ確かなものとされたと定義されている。けれども、確な証拠を持った事物については、我々は信じていると言うべきではなく、知っていると言うべきである²¹⁾。

次に、聖書は神の言葉であると承認することは、確な証拠に基づくものではなく、信仰に基づくものであるし、信仰は我々が他の人々に抱く信頼にあるということが理解されると、そのように信頼されている人々とは、うつし身となった全能の神の驚くべき所業を眺めた時代から、互いに継承してきた神の教会の信心家のことであることがはっきりしてくる。しかし、このことは、神は信仰の所業者ないしは動力因ではないということの意味するものでもないし、信仰は神の霊なしに人間のうちに生まれるということの意味するものでもない。というのは、我々が承認し、信ずるすべての立派な意見 (それは、聞くことから生まれ、聞くことは教えることから生まれ

るが、両者共、自然的なものである）は、神の所業であり、自然の製作物はすべて神のものであって、神の霊に属するものだからである。これには例がある（出エジプト記、第二十八章、第三節）。「汝、すべて心に知恵ある者すなわち我が知恵の霊を充しおきたる者等に語りてアロンの衣服を製らしめ、これを用いてアロンを聖別して我に祭司の職をなさしむべし²²⁾」。それ故、我々が信じている信仰とは、知恵の霊によって神の霊がある人に他の人以上に技能上の知恵を授けたり、知恵の霊によって神の霊は我々の日常生活に関係している他の点において、ある人が信ずるものを同じ根拠に立って他の人は信じないということや、ある人はその上位者の意見を尊び、その命令に服従するのに、他の人々はそうしようとはしないということを惹き起こしたりするという意味における神の霊の所業のことであるということになる。

更に、聖書は神の言葉であるという我々の信仰は、我々が「教会」(church)に寄せる信頼から始まったことを理解すれば、同じ聖書の文言の解釈を自分自身の意見に委ねるよりも、教会に委ねる方が「安心できる」(safer)ことは疑いのないところである²³⁾。

さて、人間の「神への愛情」(affections to Godward)について言えば、愛するということは愛されるものについての表象ないしは概念を喜ぶことであるのに、神については概念を持ちえないから、従って、神を愛するということは、聖書においては「神の命令に服従して」(obey his commandments)、人間が相互に愛し合うということの意味する。また、全能の神に「信を置く」(trust)ということは、何かを生じさせるための我々自身の力を「越えている」(above)すべてのものを神の「好意」(good pleasure)のおかげだと見なすことである。このことは、「唯一の」(one)神を承認することと全く同じことであり、この承認は第一の命令なのである。そして、キリストに信を置くということは、キリストは神であると承認することに他ならず、これが我々キリスト教徒の信仰の根本的条項となる²⁴⁾。

こうして、第一の、最も簡単な原理を見出すのに必要な人間の自然 (the nature of man) を考察したが、この原理によって政治の規則と法の構造は、最終的に解明されるのである。それについては、稿を改めて論ずることにしよう。

註

- 1) English Works of Thomas Hobbes. Vol. IV. p. 79.
『法学要綱』の第一部は、人間の本性について書かれた前の論文に依存していると述べられている。なお、以下、すべてこの巻からの引用である。
- 2) p. xiii. これに関連して、第十三章、第三節を参照されたい。そこでは、こう述べられている。「人間の能力、情念、挙動について、つまり、道德哲学、政治、統治、法について書いた人々は、問題の疑念を取除くどころか、拡大してしまったし、アリストテレスによって述べられたこと以上に知っているとは主張しない。彼らは研究の必要はないと考えているが、その理由は、一般に受入れられている意見をみずからの原則にしているからである。」p. 73.
- 3) p. 1.
- 4) p. 26. なお、知識の問題については、第五章を参照されたい。
- 5) p. 31.
- 6) pp. 31-32.
- 7) p. 32.
- 8) pp. 32-33.
- 9) p. 33.
- 10) pp. 34-37.
- 11) pp. 37-38.
- 12) pp. 38-40.
- 13) pp. 40-52.
- 14) pp. 52-53.
- 15) p. 54.
- 16) p. 57.
- 17) pp. 57-59.
- 18) pp. 59-60.
- 19) p. 64. このことに関連して、教養ある人が、数学者と教義学者の二種類に分類されている。前者は論議を生まないのに対して、後者は論議を生み出す。pp. 73-74.
- 20) p. 64. なお、訳は日本聖書教会発行の「旧新約聖書」を採用した。
- 21) p. 65.
- 22) p. 65. なお、訳については同上。
- 23) pp. 65-66.
- 24) p. 66.